

梅鶯仏教壮年

第16号
2004年
10月31日

梅鶯仏壮旅日記

会長 北村喜代信

9月24日・25日の両日に亘り、梅鶯仏壮の例会行事として、本山参拝親睦旅行を予定通り実施いたしました。



阿弥陀堂前にて

私を含め7名の参加者を得て有意義で和気あいあい、とても楽しい旅となりました。

初日は私と田中隆さん森勝昭さんの3人が坂田駅から出発し、電車に乗るやいなや、すぐさま車中サミットの開幕とな

梅鶯仏教壮年会

報恩講

12月19日(日)

夕刻より

本年度の報恩講を右記の通り厳修いたします。詳しいご案内は後日行いますので、是非お参り下さい。

なお、日程が当初予定から変更となりましたので、ご注意願います。

り、NHK大河ドラマとなる山之内一豊の妻の話から、市町村合併の話まで広いジャンルの意見交換があり、京都までの所要時間54分がとても短く感じられました。

京都駅では長野住職がわざわざホームまで出迎えて下さいました。

住職と我々3人は、所用で先に京都にいられていた田中薫さんと本願寺聞法会館で合流し、5人で本山に参拝をいたしました。

「お西さん」へは、私が子供のころ親に連れてきてもらって以来で親に連れられてきて初めての参拝と同じでした。ご本堂は蒸し暑い当日の気候ではありましたが、私をして身の引き締まる「シヤン！」とした気持ちにさせるのには十分すぎる荘厳なたずまいでありました。

この後、法話を聴聞し、6時の夕食の時間まで少し間がありましたので、各部屋で休んでいましたと合流され、6人で夕食をとりました。

夜7時から常例法会館における常例法



夜の聞法(聞法会館にて)

教のお話に耳を傾けているところ、に、漸く仕事を終えた北村幸夫さんがかけつけられ、無事7名がそろいました。

然して、我々凡夫は、ご法話が終わるやいなや、四条宮川町の懇親会場『紫左門』へと脱兎のごとく聞法会館を後にしたのであります。

懇親会での状況は、オフレコという7名の約束で、プレス発表は「ほっこりごみようさん」といたしました。

二日目は、昨晚(正確には今朝まで)痛飲したにもかかわらず、朝5時過ぎに起床し、全員「シヤン！」として6時から尋朝勤行に参拝いたしました。

9時から書院・唐門・飛雲閣を参観させていただきますました。

本山職員松尾氏の微に入り細に入った説明に、

桃山文化のなにかを感じ取った我々でした。

長野住職のお陰で、一般の方には普段拝観できない国宝・重要文化財の建物を内部までご案内いただきましたこと、参加者一同感激・感謝をいたしました。



書院正面玄関(国宝)

A group of seven people, four men and three women, are standing in a row in front of a traditional Chinese building. The building features a dark, ornate roof with golden decorative elements. The group is dressed in a mix of formal and semi-formal attire. The setting appears to be an outdoor courtyard or plaza.

国宝「唐門」の前にて

本 当 に 日 本 の す ば ら し い 文 化 、 歴 史 的 価 値 の 高 い 伝 統 美 を 時 間 を か け て ゆ つ く り 見 せ て い た だ き ま し た 。

帰 り は 京 都 駅 近 く の 食 堂 で 、 や は り ム カ エ 酒 を い た だ き な が ら 昼 食 を と り 、 予 定 よ り 早 め の 電 車 に 乗 り 帰 路 に つ き ま し た 。

全 員 無 事 坂 田 駅 の ホ ー ム に 「 シ ャ ン ! 」 と し て 降 り 立 っ た の は 午 後 2 時 ち ょ つ と 前 で 、 お 互 い の 明 日 か ら の 活 躍 を 念 じ つ つ 散 会 い た し ま し た 。

終 わ り に な り ま し た が 、 住 職 を 始 め 、 関 係 各 位 、 会 員 の 協 力 や お 世 話 で 本 当 に 楽 し い 親 睦 旅 行 と な り 、 二 日 間 を 十 二 分 に 満 喫 で き ま し た 。 本 当 に あ り が と う ご ざ い ま し た 。

次 回 は よ り 多 く の 会 員 皆 様 の 参 加 を 得 て 、 よ り 盛 大 に 開 催 さ れ る こ と を 願 っ て お り ま す 。

合 掌



国宝「唐門」の前にて

朝々に仏前に座し読經する
静けきころ一日もたず

一きゅつ きゅつ きゅつ
 ご本山には二つの大きなお御
 堂（阿弥陀堂と御影堂）があ
 ります。その両堂をつなぐ渡
 り廊下を歩くときに鳴る敷き
 板のきしむ音です。
 この「鳴き音」を聞いたび
 になにか懐かしく和らいだ気
 持ちになります。
 そうです。この「鳴き音」
 は私の父も母も、祖父も祖母
 も、そしてそのまた父母も祖
 父母もみんな聞いてきた「鳴
 き音」なのです。
 お念仏を悦ぶ人々が、一度
 は訪れてみたい、そしてお参
 りをしたいと願うところ、そ
 れが心のふるさと「ご本山」
 なのです。

○ご本堂の建築費は？
 先年、ある外国の高官がご
 本山を訪問された際、拝観が
 終わり境内に立たれ、あまり
 に立派な本堂を見上げ、驚き
 のあまり「この建築には、ど
 れほどの経費がかかりました
 か」と聞かれたそうです。
 その問いに対して、ご
 本山の案内の方は、六本
 の指を立てて示されまし
 ました。



この六本は60億円でも600億円でもありません。南無阿弥陀仏の六字の名号を示されたのでした。

それは、南無阿弥陀仏のご本願に生きる人々の報謝の懇念によつて築かれたものである、とても時価に換算できるものではありませんという意味だったのです。

事実、四百年ほど前に建てられた御影堂は、全国の僧侶・門信徒の方々の、「お念仏に育てられた身の幸せ今こそ恩に報いるときぞ」との思いにより、巨大な材木が、何百何千本となく各地から寄進され、腕に職のある門信徒の大工や左官、鳶職などが、各地から陸続とご本山に馳せ参じ、報謝のお手伝いに励まされたお陰により、現代の建築技法をもつてしても困難といわれる見事な建造物が築き上げられたのでした。

以来、念仏者の心の拠り所として多くの人々がお参りをなされてきたのです。

「きゅっ きゅっ きゅっ」の「鳴き音」は、その史の重みと、連綿とお念仏を相続し続けて下さったご先祖の方々に思いを馳せるひびきで



あるとともに、この私の「いのちのひびき音」のようにも感じられます。

も、本願寺の入り口で手を合
わせお辞儀するお年寄りの姿
を見て、思わずはにかみなが
らもお辞儀をするそうです。
単に家の宗教が浄土真宗だ
からというのではなく、お釈
迦さま、親鸞さまによつてあ
きらかにされたお念仏の教え
が、悠久の時を超え、ご先祖
さま方を通じて今この私に
とどいてくださっていること
の重みを考えるとき、いよいよ
お念仏の確かさがいただけ
るのではないのでしょうか。
そして、さらに私たちの子
や孫に伝えていくことが、念
仏者としてのつとめなのでは
ないでしょうか。

本願寺参拝を終えて 住職

ほろほろと鳴く
山鳥の声きけば
父かと思ふ
母かと思ふ

行基菩薩

